

本学所蔵・谷崎潤一郎書簡とその周辺について

齊藤美紗

書簡翻刻

《凡例》

配列について

一、本資料は、本学所蔵の、谷崎潤一郎が各人に宛てた書簡六通と、付属資料として昭和二年に記された色紙一枚からなる。これらの書簡には、整理のために、年代順に文書番号を付した。

一、六通の書簡は、いずれも昭和二十年から二十五年の間に
出されたものであり、宛先によって三群に分類される。
分類のために、書簡群名を付けた。保坂幸治宛の葉書二
通は、保坂①②、岡成志・松代夫人へ宛てた二通の書
簡と、岡夫妻の名前が記されている色紙は、岡①②

と、岡付属資料、青山虎之助に宛てた書簡二通
は、青山①②とした。(①②の順は、年代順)。

一、翻刻の頭には、「書簡群名、文書番号、年月日、書簡の
形式」を入れた。

翻刻について

一、書簡の表記については、漢字は新字体、仮名遣いは原文
通りを原則とした。また、変体仮名、カタカナなどにつ
いては、原文通りとした。

一、破損、汚れなどにより判別不能の箇所は□とした。また、
判読が確かでないものについては(カ)と傍記した。ま
た、見せ消しの箇所は、元の字を記し右側に／／を傍記
し、その下に訂正した字を記した。また、完全に墨で塗

りつぶされているものは●で示した。

一、書簡本文の行間に書かれたものは、「」で括り、「行間二」と傍記した。

一、印鑑に関しては、押韻された箇所に印を、その下に内容を「」で括り記した。また印鑑内の改行は／で示した。

一、色紙や封筒に書かれた文字の位置や配置については（）内に示し、傍記した。

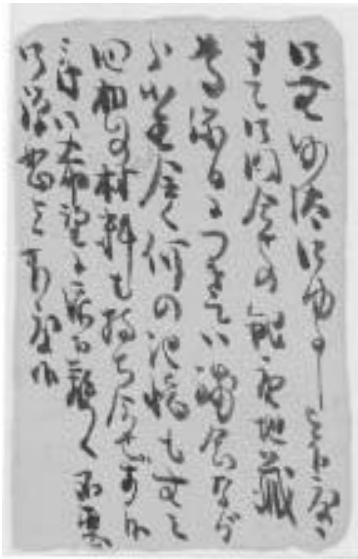
一、封筒に押されたスタンプは、「」で括り、「黒スタンプ」などと傍記した。また、消印についてはその場所に○を記し、内容については「書簡群名、文書番号、年月日、書簡の形式」の次に記した。さらに、切手に関しては、その場所を□で示した。

一、封筒に記された谷崎とは異なる筆で書かれたもの（速達など）は、「」で括り、「異筆」と傍記した。

一、その他、注意事項については、「」内に示した。



岡付属資料（文書番号1）写真、83頁に翻刻



【保坂①】 文書番号6 昭和二十三年四月九日 葉書

左京/23/49/〒

葉書・表

「東京都中央区

銀座四丁目三

保坂幸治様

【黒スタンプ】

【京都市左京区南禅寺

下河原町五十二番地

谷崎潤一郎】

四月九日

葉書・裏

御無沙汰御ゆるし被下度候

さて御問合せの銀座地藏

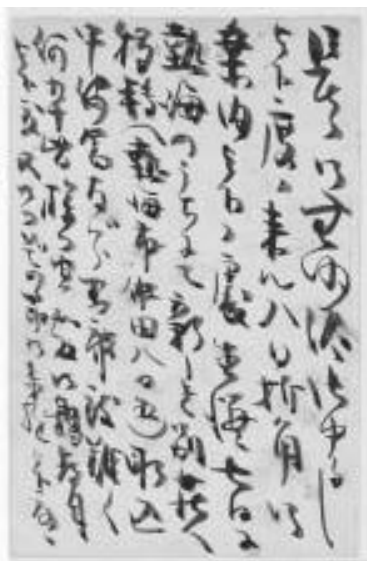
尊縁日につきてハ残念なが

ら小生全く何の記憶も無之

回想の材料も持ち合せず候

ニ付御希望に添ひ難く不悪

御諒恕被下度候



「保坂②」 文書番号7 昭和二十五年三月六日 葉書

熱海 / 25 / 36

葉書・表

「東京都京橋区

銀座四ノ三

保坂幸治様

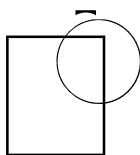
「黒スタンプ」

【静岡県熱海市上天神町

山王ホテル内別荘六一号

谷崎潤一郎】

六日



郵便物には
配達局名を】

葉書・裏

長々御無御沙汰ゆるし

被下度候来ル八日折角御

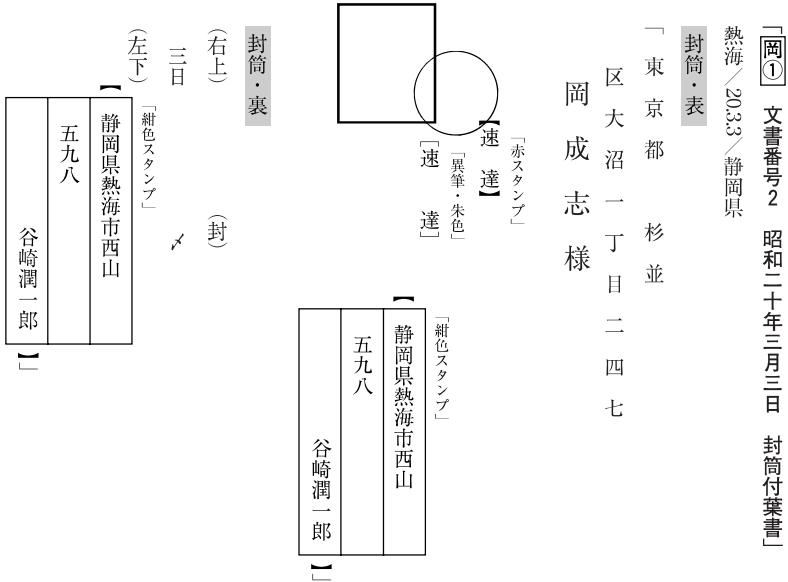
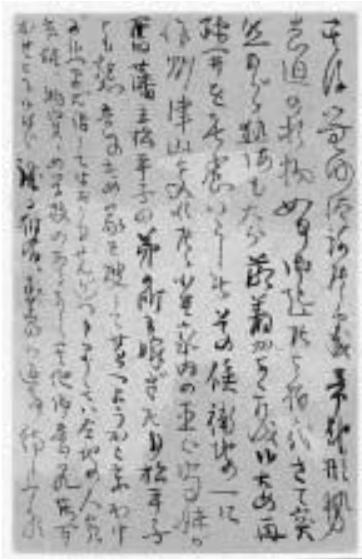
案内被下候処生憎七日に

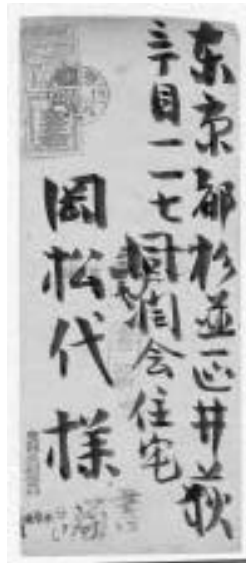
熱海のうちに新しき別荘へ

移転（熱海市仲田八〇五）取込

中残念ながら出席致難く

何卒皆様へ宜敷御鶴声
被下度又御ついでにの節御来遊被下度候





葉書・表

【墨付き無し】

葉書・裏

其後御無沙汰致居候処帝都形勢

急迫の折柄如何御起居被遊候哉 さて突

然ながら熱海も大分落着かなく相成候ため再

疎開を考慮いたし居候 その候補地の一に

作州津山を入れ居候小生家内の直ぐ次の妹が

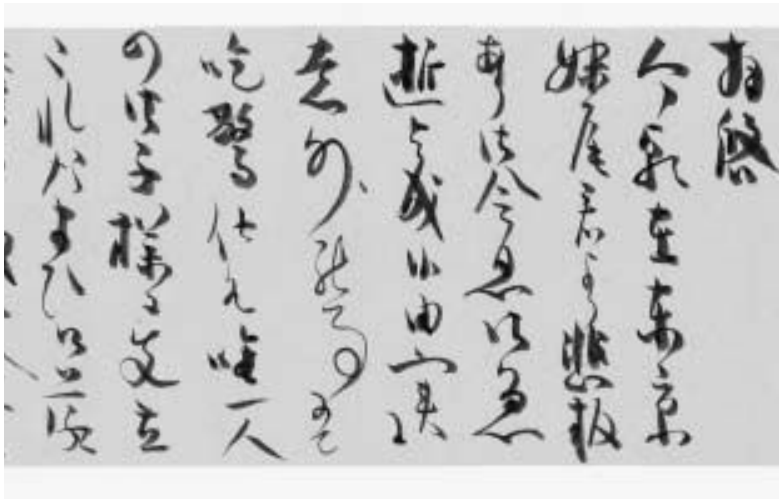
旧藩主松平子の弟の所に嫁ぎ居付松平子

とも懇意のため家を捜して貰へようかと云ふわけ

に候(まだ話してはありませんが) つきましては同地の人気

気候、物資、女学校のあるなし其他御意見お聞

かせ被下候はゞ誠に難有、至急御返事待上候



〔岡②〕 文書番号5 昭和二十二年九月十八日 封筒付巻紙書簡

京都永観堂前 / 22.9.18 / ★★

封筒・表

「東京都杉並区井荻

三丁目一一七

同潤会住宅

〔赤色スタンプ〕

〔書留〕

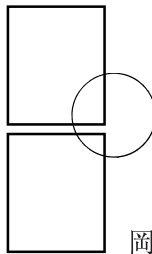
岡松代様

〔異筆・朱色〕

〔書留〕

〔黒スタンプ〕

〔京都永観堂前〕



封筒・裏

(右上)

九月十八日

(左下)

(封)

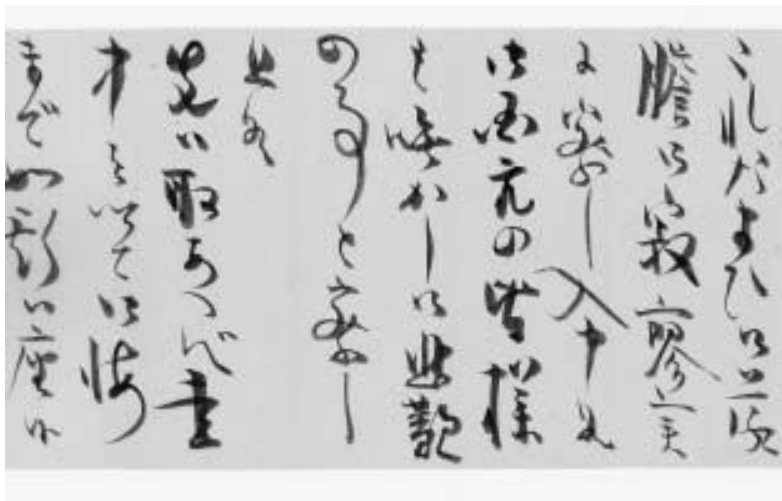
メ

〔黒スタンプ〕

〔京都市左京区南禅寺

下河原町五十二番地

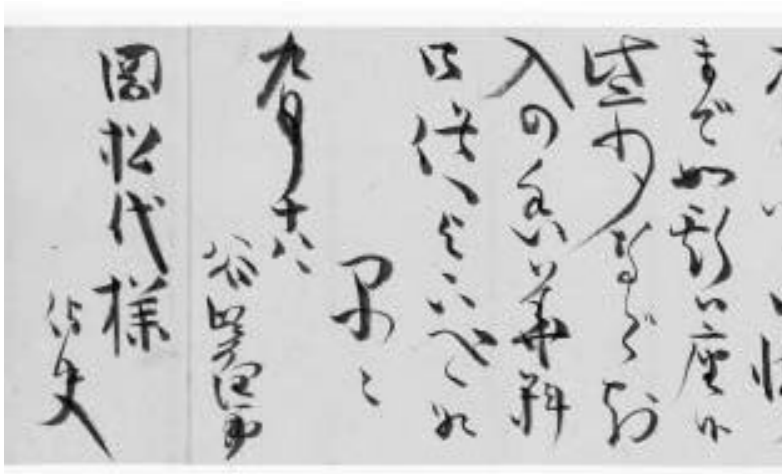
谷崎潤一郎



巻紙

拝啓

今朝在東京
 妹尾君より悲報
 あり御令息御急
 逝被成候由実
 意外の事にて
 吃驚仕候唯一人
 の御子様
 に先立
 られたまひ御落
 膽御寂寥実
 に察し入申候
 御国元の皆様
 も無かし御悲歎
 の事と察し
 上候
 先ハ取あへづ書
 中を以て御悔
 まで如斯御座候
 些少なから封
 入の香華料



御供へ被下べく候

早々

九月十八日

谷崎潤一郎

岡松代様

侍史

〔岡村属資料〕 文書番号1 昭和二年五月八日 色紙

色紙・表

(上段・反時計回り)

岡まつよ

長尾淑子

木村辺

阪本清雄

野澤千代子

(中央)

谷崎潤一郎

色紙・裏

(左端・縦書き)

昭和貳年五月八日 於平和楼

(下段・反時計回り)

尾本憲

黒屋 （前男） 子

八杉和

山下不味子

鷺見豊

(左上)

岡成志

(左下)

葉健二



〔青山①〕 文書番号3 昭和二十一年四月二十三日 封筒付書簡

〇〇〇／21.4.23／★★★

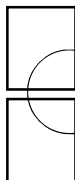
封筒・表

「東京都麹町区内幸町

大阪ビルヂング旧館 六階

新生社方
〔速達〕
〔異筆・朱色〕

青山虎之助様



封筒・表

(右上)

四月二十三日

(左下)

京都市東山区

下河原上弁天町四六三

喜志元方・谷崎潤一郎

原稿用紙・一枚目

拝啓

安田氏紹介の名刺御落掌のこと、

存候

一昨日水嶋氏来訪なされ本日写



真撮影仕候

雑誌原稿段々に延引申訳無之

五月に八間ちがひなく差上候間今

暫く御猶予相成度候此之儀水嶋

氏にも固く御約束仕候

さて前便に申上三万円権利金附

の借家ハ都合に依り破談に相成候へ共

目下他に一二の話ありその方の談判

を進め居り候二付いづれにしても「行間二」御送金

相願度候小生ハちよつと両三日勝

山まで行つて参り候へ共郵便物ハ全

部京都喜志元宛に御よこし

被下度候猶々今度京都市四條

河原町住友銀行●支店に小生名儀

にて普通貯金いたし候二付御送

金ハ右口座へ御振込の上副証

原稿用紙・二枚目

御送り被下候はゞ一番便宜に御座候

もし又現金にて御届け被下候ハゞ

小生不在の節ハ喜志元女將に御預

け置被下度、女將にもよく頼み置候



先ハ要用まで如斯御座候

四月廿三日

谷崎生

青山様 侍史

〔青山②〕 文書番号4 昭和二十一年七月二日 封筒付書簡

封筒・表

「日本橋区江戸橋三丁目

四ノ三

新生社方

青山虎之助様

根津清治持参

封筒・表

(右上)

(封)

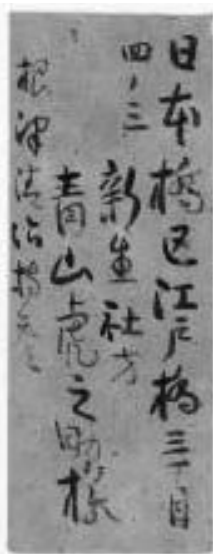
七月二日

(左下)

〔黒々シク〕
【京都市上京区寺町今出川上ル

五丁目鶴山町三番地ノ一

谷崎潤一郎



原稿用紙・一枚目

拝啓

昨一日夜かう云ふ電報を頂戴、水嶋氏にも見せ候へども電文不明にて全く意味分らず、然し多分貴下よりの電報ならんと存じ候御参考までに御目につかけ候

水嶋氏ハ小生の手紙と行ちがひに三十日来訪、大阪ビル立ち退きて大混雑の由、御迷惑お察し申上げ候

本日水嶋氏に写真師を世話して頂き挿入の写真を撮●影、明日は現像出来候

由、さしゑも五日朝までにハ揮毫出来候、

さしゑ(凸版)一枚、写真二三葉(銅版)の予定に御座候、原稿は二ヶ月に連載することとし、今回ハ二十枚ぐらゐ御渡し申候、此の

原稿も大概五日中にハ出来候へども或は一日ぐらゐ延び候やも知れず候

「女性」の原稿は、「新生」の原稿を全部書き上げたる後に執筆可致候

次に恐縮に候へどもいよく新円手づまりとなり困却いたし居候ニ付四五円ぐらゐに



原稿用紙・二枚目

ても結構に付急場を救って頂き度、わざく

此の便手紙を持たせ使の青年を差し遣はし候

二付宜敷願上候、但し金子は多ければ一層

結構に候、此の青年ハ小生の／＼妻の子供にて

根津清治と申候、同人の印にて受領証お

書かせ被下度候念のため水島氏の書簡を

も持参いたさせ候間御安心下され候て現金

にて御渡し下され度候、都合にて一兩日滯

京いたせても結構に付なるべく持たせてお

帰し被下度候

そのうち貴下も御入洛なされ候由御待ち申

上候

「まんじ」の校正は原稿完了まで御猶予被

下度候

七月二日夜

谷崎潤一郎印【谷崎／潤一郎】

青山虎之助様



解説

はじめに

本学図書館では、谷崎潤一郎の書簡六通、色紙一枚を貴重書として所蔵している。六通の書簡は、いずれも昭和二十年から二十五年の間に出されたものであり、うち四通は京都から出されたものである。今回、これらの調査を行い、宛先別に三群に分類し、翻刻を行ったうえで、考察を加えた。第一章で保坂幸治、第二章で岡成志・松代夫妻、第三章で青山虎之助宛の書簡について、それぞれ書簡の内容と、そこから読み取れる谷崎との関係について記す。

第一章 保坂幸治宛の葉書について

はじめに、昭和二十三年四月九日、昭和二十五年三月六日の保坂幸治宛の葉書二通を取り上げる。

宛先は、谷崎潤一郎自筆の墨書きで、差出人・谷崎の住所と氏名は黒インクのスタンプが使用されている。なお、年代は、消印より判別した。

いずれの二通も東京銀座に住まいする保坂幸治宛であることから、保坂と谷崎の関係について書簡から読み取れること

を考えてみたい。

まず、銀座在住の保坂という人物から確認を始めた。保坂幸治は、昭和二十年九月、銀座和光横に「三河屋食料品店」を開業した保坂芳次郎の後継者で、後に銀座連合会会長となり、明治末から昭和にかけて、銀座の変革と再興に貢献した人物である。保坂幸治は実業家であり、作家あるいは出版関係者ではない。このような保坂と谷崎との関係は、意外にも谷崎の故郷―日本橋―から紐解くことができる。二人の関係を物語る文献資料は、昭和三十年八月の『銀座百点』の中にある。これによると、谷崎と保坂は中学時代の同級であることが判明する。

この『銀座百点』について簡単に確認したい。これは、昭和三十年一月、協同組合である「銀座百点会」が月刊誌として創刊を始めた銀座のコミュニティ誌である。現在も『月刊銀座百点』として、銀座の情報、文化を発信し、創刊当初から、久保田万太郎、吉屋信子、源氏鶏太らの文章が載せられ、また、連載においては、向田邦子『父の詫び状』、池波正太郎『銀座日記』、和田誠『銀座下キドキの日々』など、著名人が多く加わっている。

さて、谷崎と保坂は、この『銀座百点』の昭和三十年八月

号で、「われらのティーン・エイジャー―中学生の頃―」と題する対談を行っている。対談では「飛び上がり進級の秀才」「山手組と下町組」といった、二人の中学時代が鮮明に語られている。「飛び上がり進級の秀才」と題された部分では、当時、谷崎が飛び級をして中学三年になると一年上の保坂と同級になったことを、「山手組と下町組」では山手と下町での違いについて笑いを交えて語られ、谷崎にとつて保坂という人物は、同じ下町組の、気のおけない友人であったようである。

では一通目、昭和二十三年四月九日の葉書について見てみたい。保坂が銀座地蔵の縁日について問い合わせを行い、それに谷崎が返答をしたものである。この銀座地蔵とは、現在、銀座三越百貨店屋上に鎮座する銀座出世地蔵尊のことで、幕末の文久末年、近くの三十間堀から発見されたと伝えられ、明治に入ると銀座の名物になり、地蔵尊の縁日の際の賑わいなどはたいへんなもので、文学作品にも度々取り入れられている。⁽¹⁾

谷崎は、この銀座出世地蔵にほど近い東京市日本橋区蛸殻町二丁目十四番地（現在は中央区日本橋人形町二丁目七―十）で出生しており、その縁で、保坂はこの地蔵尊の思い出といった文章の執筆もしくは講演を依頼したものと考えられよう。

保坂が関係することとなったコミュニティ誌『銀座百店』の創刊は昭和三十年一月であるから、『銀座百店』の原稿依頼とは考えられない。

次に、二通目、二年後の昭和二十五年三月六日の葉書である。これは、三月八日、ある催しが行われるということ、保坂が谷崎を勧誘するが、谷崎は熱海への引越と重なることを理由に辞退、欠席を詫びるとともに、熱海へも遊びに来るようにと伝えたものである。ここでいう八日の催しがどのようなものであるかは不詳である。

「熱海のうちに新しき別荘へ移転（熱海市仲田八〇五）」というのは、この葉書に先立つ二月に購入した別荘「前の雪後庵」のことである。谷崎は昭和二十三年十一月頃から、この葉書の差出にもある同じ熱海の山王ホテル内の別荘六一号に滞在するようになっていたが、昭和二十五年に新たに別荘を購入して二月七日から九日にかけて転居、以後、夏冬をそこで過ごすことが多くなる。本書はこの新居への転居直前にしたためられたものということになる。

第二章 岡成志・松代にかかわる資料について

次に、岡成志宛の封筒付葉書、岡松代宛の封筒付巻紙書簡

を取り上げる。付属資料として、年代がさかのぼるが岡成志・松代夫妻の名が書かれた色紙がある。いずれも岡氏の名が記されているため、この三つの資料を岡関係としてまとめ、岡と谷崎との関係について考察したい。

岡と谷崎との関係は、谷崎が昭和三十五年十一月に雑誌『中央公論』に発表した「三つの場合―岡さんの場合」に詳しい。そこで、この「三つの場合」の記述を参考に、少し煩雑になるが、谷崎と岡との出会いから確認し、谷崎にとつての岡という人物について押さえて行こう。

岡との出会いは、大正十二年九月の関東大震災の直後であった。この年の夏、谷崎一家は避暑のため、伊香保や箱根小涌谷に滞在、八月二十七日に横浜の自宅（山手の外国人居留地）へ戻った。しかし、谷崎だけは仕事を続けるため三十一日に小涌谷ホテルに引き返していた。そして、九月一日震災が起こった。谷崎は、被災地より離れた場所にいたため無事であったが、横浜にいる家族の安否確認のため奔走することとなる。地震で箱根以東の汽車、道路、山道すべてが通行できず、谷崎は海路で横浜へ戻る方法を思いついて、神戸へ向かった。情報を求め、横浜からの避難者がいるという救護事務所を歩き回ったが、一人では手が廻らなくなると、大阪朝

日新聞社に勤務する内海氏が同僚の岡を谷崎に紹介した。これが岡との最初の出会いである。

このときの第一印象を、谷崎は「あまり風采の上らない」「鈍感な」「気の利きそつもない」人物と谷崎らしい親しみを込めた表現をし、その印象は岡が死ぬまで改まることなかったと言っている（「三つの場合」）。

幸い、谷崎は海路で横浜に上陸、東京の親戚方で家族と再会することができた。一家の無事を確認するとすぐ、京都の牧野省三を頼り、家族を連れて、同年十、十一月京都の借家に住まいしたが、十二月には六甲苦楽園に移る。岡とはこの阪神間での生活を機に再会、以降、二十年以上にわたる交際が始まったのである。

ではここで、岡成志という人物について触れておきたい。岡は、谷崎と出会った大正十二年には、『朝日新聞』に勤務していたが、この頃は『神戸又新日報』に勤務していた。岡の人は柄は、「素朴で、質実で、金銭に淡泊で、田舎臭いところがある」のが「大いに人に愛せられて、方々の奥さんたちに信用され、重宝がられた」ようで、谷崎も、岡の文字や文章については評価していた（「三つの場合」）。

ここで注意しておきたいのが、岡は新聞記者だけでなく、

ユーモア小説の作家としての一面もあったということだ。昭和初年頃、『関西中央新聞』に「婦人読本」と題した短文を書き、他の文章とまとめて『女心風景』（昭和四年十一月、創元社）を刊行する。さらに、「新作ユーモア小説全集」第八巻『イヴと蛇の戀』（昭和十三年一月、春陽堂書店）、「諷刺ユーモア小説集」『一萬圓使ふ話』（昭和十四年六月、代々木書房）等の著作と、P・G・ウッドハウス著「ユーモア長編小説集」『戀人海を渡る』（昭和十五年三月、東成社）の翻訳書などがある。

「三つの場合」から読み取れる岡の人物像は、仕事柄交友関係が広く、また顔も利くということから、谷崎の私的な問題の手助けをするという面が強い。今回調査した書簡に手がかりとなるものはなかったが、ユーモア小説の作家として岡を見るならば、谷崎のもとに集まった作家、あるいは、作家同士の交流、という視点からの関係も想像できるかもしれない。

さて、この頃の谷崎といえば、二度の離婚と再々婚が確認される。まず最初の離婚は、昭和五年八月、後に「細君譲渡事件」として話題となった千代子夫人との離婚は有名であるが、その後、昭和六年四月、谷崎は、古川丁未子と再婚して

いる。この婚礼の媒酌人となったのは、岡成志・松代夫妻である。⁽³⁾

ではまず、**岡付属資料**としてあげた昭和二年五月八日に書かれた色紙を取り上げる。この色紙は、全て毛筆で、十三人の署名が書かれている。まず中心に谷崎、その周りに円を描くように十人の名が並び、色紙の端に岡成志と葉健二両名の署名がある。裏には、「於平和楼」とあることから、平和楼で宴か何かを催したことが想像される。

当時、谷崎は、神戸岡本に住んでいた。そしてこの催しについては、同年五月十日の『神戸又新日報』夕刊に「潤一郎氏を招いて 十人の夫人の愉快な集ひ」という記事が掲載されていることから、おそらく、この「十人の夫人の集い」が、神戸の平和楼で行われたと解して良いだろう。⁽⁴⁾ ちなみに、署名の人物のうち、「岡まつよ（松代）」は、岡成志の夫人、「葉健二」はクラブ関西の支配人である。その他の人物に関しては不詳である。この色紙は、谷崎を中心に「十人の夫人」が集う華やかな催しが行われていたことが知られ、当時の雰囲気、今に感じさせてくれるのである。

続いて**岡①**昭和二十年三月三日の封筒付葉書である。年代については、封筒の消印より判別した。

当時、東京では戦況が悪化し、谷崎は、熱海から再疎開を考えるようになっていた。その候補地に、三番目の妻・松子の妹が嫁いだ旧藩主松平家との関係で、津山を考えていた。書中の「小生家内の直ぐ次の妹が旧藩主松平子の弟の所に嫁ぎ候」というのは、谷崎の妻・松子夫人の妹・重子が、旧藩主松平家の当主・康春の弟・明に嫁いでいたことを指す。そこで、岡に津山の様子（「人気、機構、物資、女学校のあるなし」）を聞きたいと葉書を送ったのが本状である。なお、この葉書の一週間後の三月九日から十日にかけて東京大空襲があり、「帝都急迫の折柄」というのは、そのような状況を指すものである。

谷崎は、家族を伴い熱海の別荘に疎開していたが戦況の悪化とともに再疎開を決意する。数カ所の候補の中から津山が有力候補となったのは、松平家の存在が大きい。⁽⁵⁾

津山に關しての情報を求められた岡は、同年三月二十三日、熱海西山の谷崎の別荘を訪ねている。その時、谷崎は、彼が近々岡山の月田に避難することを聞いた。また、松平別邸は、松平家の当主・康春の所有であったので、長期滞在は出来ないという条件が付けられていたが、谷崎は、信頼する岡が近くにいることから、転居先について何らかの斡旋を期待でき

るだろうと考え、津山行の決心を固めたようである。昭和二十年五月六日、熱海を出発し、同月十五日津山に到着した。

熱海から津山行きの経緯は、右記の通りであったが、頼みの岡が同年五月二十一日に病で没してしまった。これにともない、谷崎は一時、転居先探しに苦心することになるが、岡夫人の松代が故人の遺志を継いで奔走、従兄の土井武氏に斡旋を依頼し、谷崎一家は、同年七月七日に同県真庭郡勝山町新町の小野はる方に転居することができた。谷崎は、「私は長くこのことを未亡人に感謝しなければならぬ」(三つの場合⁽⁷⁾)と述べている。

このように、岡成志の没後も、谷崎は岡夫人に助けられ、実際も続行したものである。

〔岡②〕昭和二十二年九月十八日の書簡は、巻紙を使用し、丁寧な毛筆で書かれたものである。岡夫妻の一人息子の生雄の計報を聞き、悔やみの文と、香典を添えて送ったものである。書中に出てくる「妹尾君」とは、武庫郡本山村の妹尾健太郎のことで(昭和二十年十一月三十一日、武庫郡本山村小路一二三の妹尾健太郎宛谷崎書簡による)、谷崎とは、以前から交際があった人物である。

このように、関東大震災を契機に始まった谷崎と岡夫妻の

親交であるが、以上三点の資料から見ると、両者の交流が戦後まで長く続き、また、震災と戦争を挟んで谷崎の生活が大きく変化していく節目節目に、重要な役割を及ぼしていることを物語っている。谷崎にとって、岡夫妻が重要な人物であったということが分かる資料である。

第三章 青山虎之助宛の書簡について

最後に、青山虎之助の二通の書簡について取り上げる。この青山虎之助という人物は、戦後、数々の雑誌を世に送り出した出版人である。まず、青山虎之助自身について確認しておきたい。青山は、大正三年、岡山市生まれで、文学青年であった。「昭和二十年の春ころから戦争が終わったら自由主義的な総合雑誌をつくらう⁽⁸⁾」と戦後、新生社を立ち上げ社長となる。その新生社から、昭和二十年十一月、総合雑誌『新生』を創刊、次いで、婦人雑誌『女性』(昭和二十一年四月)、さらに文芸美術雑誌『花』(昭和二十二年三月)を創刊し、昭和二十年から二十二にかけて出版界の王者として称された人物である。

青山宛の二通の書簡は、原稿用紙に書かれている。いずれも書かれた年代は昭和二十一年で、

〔青山①〕は四

月、**青山②**は七月と時期も近く、これらの書簡からは、当時の出版の状況をうかがえる興味深い資料である。そこでまず、それぞれの書簡について簡単に概要を示し、次いで二通の書簡が書かれた背景について考えていきたい。

青山①は、谷崎が、青山に、原稿が期日に遅れることを伝え、また、送金の催促をしているものである。**青山②**は、

青山に雑誌に掲載予定の原稿について進行状況を報告し、さらに、青年を遣いにして、現金の借用を求めたものである。いずれの書簡も、原稿について報告がなされた後、お金の借用を求める文言が続いている。そこでまず、それぞれの書簡における原稿とは、どの作品を指すのかという確認から始めたい。

青山①では、「雑誌原稿段々に延引申訳無之五月に八間ちがひなく差上候（中略）水嶋氏にも固く御約束仕候」とあるように、原稿が延引したことの詫びと、五月には書くという約束をしている。この書簡の後、昭和二十一年八月、九月に雑誌『新生』（通巻十号、十一号）に二ヶ月にわたって連載されたのが「磯田多佳女のこと」である。このことから、**青山①**で扱った原稿は『新生』のこれにあたと推測できる。

青山②では、原稿について細かな指示——二ヶ月にわたって連載すること、挿絵は凸版で一枚、写真は銅版で二三葉使用する——がなされているが、これは、**青山①**と同じ『新生』「磯田多佳女のこと」のことであると考えられる。雑誌原本には、多佳女遺墨の句と絵が二枚、磯田又一郎が描いた多佳女居室の絵が掲載されており、書中の指示を確認することができる。

さらに、**青山②**では、「女性」の原稿は、「新生」の原稿を全部書き上げた後に執筆可致候」とあることから、雑誌『女性』の原稿の執筆が依頼されることが分かる。これについては、昭和二十二年『女性』一月号（通巻九号）に、「都忘れの記」を書いており、この原稿のことであると考えられる。

では、次に、二通の書簡に共通する事項として、谷崎は青山にお金の借用を求めているが、これについては、どのように解せばよいだろうか。

青山①には、「前便に申上候二万円権利金附の借家八都合に依り破談に相成候へ共且下他に一二の話ありその方の談判を進め居り候二付いづれにしてもその時の用意に御送金相願度候」とある。谷崎は、作家としての活動を再開するため、

戦時中に書き溜めておいた「細雪」の原稿を抱え、疎開先の岡山から上京するのであるが、家族との生活の拠点は京都と定め、そのために必要な資金援助を青山に願い出たのがこれである。故郷の東京や、震災後長く滞在した阪神間ではなく、京都で再興を目指した谷崎にとって、青山は資金の調達先として頼みの綱となっていたようである。

青山②では「恐縮に候へどもいよ／＼新円手づまりとなり困却いたし居候ニ付四五阡円ぐらゐにても結構に付急場を救つて頂き度」、「水嶋氏の書簡をも持参いたさせ候間御安心下され候て現金にて御渡し下され度候」とあり、政府がインフレ対策のために打ち出した新円切り替えの政策の影響もあって、現金が必要となったため、遣いの青年（根津清治）を東京へやる、というものである。

これは、青山への借金の申し出に他ならないが、印税あるいは原稿料の前借であると考えられる。先にも触れたが、昭和二十年から二十二年にかけて青山は時代の寵児と言われた新興の出版人であった。周知の如く、戦争末期出版業界の低迷により、著名な継続誌を持つ大手出版社は、戦後体制を立て直し、再び発行を開始するには数年を要した。青山は、このわずかな期間を好機として新生社を他の大手出版社から独

走させようと画策、新生社の原稿料を高額に設定し、また、実際には採用されなかったが、作家と専属契約を結ぶ計画を発表するなど、斬新なアイデアで台頭した人物である。だからこそ、谷崎の申し出に快く付き合つたのではないだろうか。

青山②によると、「まんじ」の校正は原稿完了まで御猶予被下度候」とあるが、これは実際に青山の新生社から昭和二十一年十二月一日『正』が刊行されている。『正』の初出は、昭和三年三月から同五年四月に雑誌『改造』の連載で、後に刊行されている（昭和六年四月、改造社）ことから、この時の『正』は復刊であることがわかる。『正』以外に復刊された谷崎の作品は、『蓼喰ふ蟲』（昭和二十一年二月、鎌倉文庫）、『盲目物語』（昭和二十一年七月、中央公論社）、『鮫人』（昭和二十一年十一月、全国書房）、『暫間』（昭和二十一年十一月、創元社）、『痴人の愛』（昭和二十一年十二月、生活社）、『刺青』（昭和二十二年六月、全国書房）、『お艶殺し』（昭和二十二年六月、全国書房）など、多数にのぼる。戦後の出版界の様相が伺えるものである。

ところで、当時の谷崎の私生活について資料で確認したところ、意外ではあるが、このような借金の申し出が頻繁であることが指摘できる。

この書簡と同じ昭和二十一年五月三十一日には、川端康成に、転居で金がないことから一万円ほど都合してもらうため、六月五日頃に使いの青年・根津清治を遣っている⁽⁹⁾。この申し出は、鎌倉文庫から出版された『蓼喰ふ蟲』の原稿料である。また、『谷崎先生の書簡』⁽¹⁰⁾にも同様のことが見えている。こうした資金収集の甲斐あつて谷崎は、同年八月、京都では初めて住宅を買い取っている（「前の潺湲亭」左京区南禅寺下河原町五十二番地）。

さて、一連の金銭のやり取りの中で、使いの青年―根津清治が度々登場するが、『青山②』では「此の青年ハ小生の妻の子供にて根津清治と申候」と紹介している。松子夫人の前夫の長男である。この頃、根津清治は日本大学の学生で、当時、谷崎の周りで同様の使い（出版者へ原稿料や印税の受け取り）をしていたようである。谷崎の清治への信頼はあつく、後に、松子夫人の妹・重子が渡辺明と結婚すると、その養子となっている。また、彼が高折千萬子と結婚した際には一時、「後の潺湲亭」で、谷崎一家と同居もしており、谷崎が晩年熱海へ転居すると、京都との繋がりにおいて重要な役割を担ったのは、この渡辺家であった。

おわりに

以上、本学所蔵の書簡から読み取れることを、二、三指摘したのであるが、扱った書簡は、昭和二十年から二十五年のものであり、結果的には、この時代の谷崎潤一郎について―作家としての活動や交友関係について考えることとなった。金銭の借用の申し出など意外な発見もあり、戦後の大きな変化の中で、谷崎が作家活動を続けられたのは、書簡に登場した交友関係によるものも大きいことも今回指摘できたのではないだろうか。しかし、わずか七通の資料を使って描いたものであるため、幾分考察が不十分となつてしまった可能性があるが、今後は、さらに、作品との関連も視野に加え、この時代の谷崎潤一郎についての考察を深めたいと思つている。

注

- (一) 銀座出世地蔵の縁日については、池田弥三郎の『銀座十二章』「六の章 橋と水の物語下」（昭和四十年五月、朝日新聞社）や、小泉孝・小泉和子の『銀座育ち 回想の明治・大正・昭和』（平成八年九月、朝日新聞社、朝日選書五六二）、また、岡本綺堂の『定本 半七捕物帳』第五卷「幽霊の観世物」（昭和四十四年二月、告文社）冒頭に取り上げられるなど、銀座の名物

であった。

(2) 同年十月には等持院中町十七番地、十一月には左京区東山三条下ル西の法要寺内の塔頭に住まいしていた。

(3) 二年後の昭和八年五月に離婚している。

(4) 『神戸又新日報』のこのコーナーの書き出しに「私達の名前は書かない方がよろしい」と云ふ婦人達の御希望で、このニュースとも無駄話ともつかないものが出来ました。」と断りが添えられている。

(5) 昭和十七年三月熱海市西山五九八番地に別荘を購入。『細書』の執筆に専念する。その後、昭和十九年四月、家族も熱海に疎開してくる。

(6) また、一方で谷崎の熱海の別荘を松平氏が疎開のため購入するという好機が到来してのことである(「三つの場合」)

(7) 谷崎は、個人的な関係を大切にする人で、例えば、お手伝いの車一枝が十六歳から六年間の奉公の後、結婚、退職したのちも、出店祝い(京都東一条に「春琴堂書店」を開業)や入退院の際の見舞や小遣いなど、欠かさず連絡を取り、親切にしていたという。(「久保義治・一枝宛書簡」(平成十一年三月、菅屋市谷崎潤一郎記念館))

(8) 『回想の新生―ある戦後雑誌の軌跡―』『インタヴュー・青山虎之助』(昭和四十八年九月、「新生」復刻編集委員会)

(9) 『谷崎潤一郎全集』二十六卷(昭和五十八年十一月、中央公論

社)

(10) 水上勉、千葉俊二編『増補改訂版 谷崎先生の書簡―ある出版社社長への手紙を読む』(平成二十年八月、中央公論社)

— 本専攻修士課程在学 —

付属資料 「本学所蔵・谷崎龍一郎書簡」一覧」

文書番号	書簡群名	年代・日付・谷崎年齢	消印	切手・局のスタンプ	受取人	差出人(谷崎)住所	形態
1	回付属資料	昭和22年5月8日 1927年 41歳	—	—	—	神戸・平和楼	色紙 墨
2	回①	昭和20年3月3日 1945年 59歳	—	（一枚はかれるカ）、七歳 熱海/20.3.3/静岡県 四七 逓達(朱筆、27所)	岡成志 東京都杉並区大沼一丁目二 四七	谷崎潤一郎 静岡県熱海市西山五九八	葉書 封筒付 墨
3	青山①	昭和21年4月23日 1946年 60歳	—	武船楼、武船楼 〇〇〇/21.4.23/★★★★	青山虎之助 東京都港区区内幸町大坂七 ルヂング旧館六階新生社方	谷崎潤一郎 京都市東山区下河原上弁天 長四六三喜志元方	照録用紙 二枚書簡 封筒付 墨
4	青山②	昭和21年7月2日	—	—	青山虎之助 日本橋区江戸橋三丁目四ノ 三 新生社方	谷崎潤一郎・梶津清治持参 京都市上京区寺町今出川上 ル五丁目鶴山町三番地ノ一	墨
5	回②	昭和22年9月18日 1947年 61歳	—	五眼、香園武船楼 京都永頼堂前/22.9.18/★★★★ 書留(朱筆)、書留(朱色スタンプ)	岡松代 東京都杉並区井荻三丁目一 一七 同潤会住宅	谷崎潤一郎 京都市左京区南禅寺下河原 町五十二番地	巻紙書簡 封筒付 墨
6	保坂①	昭和23年4月9日 1948年 62歳	—	五船楼 左京/23/4.9/〒	保坂幸治 東京都中央区銀座四丁目三	谷崎潤一郎 京都市左京区南禅寺下河原 町五十二番地	葉書 墨
7	保坂②	昭和25年3月6日 1950年 64歳	—	200 熱海/25/3.6/ 郵便物には、配達局を	保坂幸治 東京都千代田区銀座四ノ三	谷崎潤一郎 静岡県熱海市上天神町山王 ル六ノ内別荘六号	葉書 墨